

●クレイクとタルヴィング ( Craik & Tulving, 1975) およびモリスら ( Morris et al., 1977) の実験手続きの補足

P.86～87 では、処理水準を操作するために学習時に行われた方向づけ課題として、形態処理 (活字)、音韻処理 (音韻)、文章処理 (意味) の 3 種類を紹介している。

以下の表に示されたとおり、各処理水準では、質問が異なり、右列の「答え」にあるように、たとえば、形態処理とは「その単語は大文字ですか?」という質問に答えるものであり、参加者は、“TABLE” という単語が呈示された場合は “Yes”, “table” という単語が呈示された場合は “No” と答えていく。また、音韻処理、意味処理についても、同様に、呈示された英単語に対して、それぞれの質問に “Yes” か “No” で答えていくという方向づけ課題を行っている。

表 1 学習時に使用された各処理水準の質問と答えの種類  
( Craik & Tulving, 1975 の Table 1 を改編)

処理水準	質問 (方向づけ課題)	答え	
		Yes (はい)	No (いいえ)
形態処理 (活字)	その単語は大文字ですか?	TABLE	table
音韻処理 (音韻)	その単語は “WEIGHT” と韻を踏みますか?	crate	MARKET
意味処理 (文章)	その単語は以下の文章に意味的にあてはまりますか? “He met a _____ in the street”?	FRIEND	cloud